

## 2014年11月8日 飯舘村訪問の感想（6名分）

東日本大震災によって多くの方が被災した。そして、全国各地から多くのボランティアの方々が被災地の方々のために奮闘した。しかし、私に関して言えば、正直なところ自分自身と被災地が繋がる感覚がなかった。連日テレビでは緊迫した現地の状況を伝えるニュースが流れていたが、どこか別の国のことのように感じていた。「気になる」「でも、多くのボランティアがもう現地にいる」「私にできることはないのかもしれない」。そのように感じていたし、そう感じる自分に後ろめたさを感じていたことも事実であった。

その『後ろめたさ』が、今回参加させて頂いた動機となったように思う。そして、今回の訪問は「臨床心理学を専攻する者として、自分には何ができるのだろうか」ということを強く意識する機会となった。これには、農学部の溝口先生、そして林先生のフィールドに入らせて頂いた形であったということも関係していると思う。第一次産業を中心とした発展の歴史をもつ飯舘村の方々にとって、農地・土壌をどのように再生するか、というテーマは最重要課題といっても過言ではない。そして、そのニーズに対して最新の知見を提供し、データとして具体的に示すことができる農学はまさに「即戦力」として活躍できる強みをもつ領域であると実感した。その一方で、「臨床心理学を活かしてなにができるのだろうか」という劣等感にも似た感覚を抱いたのも事実である。危機状況では、まず優先されることは食糧や水、生活基盤の確保・立て直しであり、農学がまさにその初期段階において有効にアプローチしていただけることを村民の方の話から十分に確信することができた。そういう点で言えば、心理的なアプローチは実際問題、まず優先されるものではないし、必要とされるものとして、当事者から援助要請をいただくにはタイムラグが生じてくるものだと思う。外からきた第三者として、疎まれることもあると思う。しかし、第三者だからこそできることもあると思うし、援助要請をいただく前の段階で、心理的な援助を行っている存在があるということを周知したりすることはできるのではないかと感じた。桜の木の植樹であったり、一見心理と関係の無いような事柄でも、積極的にコミュニティの中に入り自分の存在を知ってもらうということが、相談所を作るであったり、そういうようなことよりも大事なのかもしれない。

「自分の住んでいる場所と比較してみてください。そこで、どう感じるか考えてみてください。」という話を村民の方がおっしゃっていたが、その点から考えてみると、東京という都会の中で日々過ごしている私にとって、飯舘村は全く異なる文化をもつ非日常的な場所として感じられた。雄大な自然であったり、そういう環境面での部分もちろん私自身の日常とはかけ離れているものであったし、小学校をはじめとする教育機関のもつ意味あいも異なっているものと感じた。当たり前のことではあるが、違うコミュニティに入るということは異なる文化の中に入るということであり、その中で人々が周囲の事物に関して行う意味付けも全く異なってくるのだと感じた。その点を考慮した援助形態を考えていく必要があるであろう。また、特に強く感じた「非日常的」な部分は、人の気配が全く感じられない閑散とした集落であり、それは非日常的というよりも不気味にすら感じられた。積み上げられた汚染土の入った黒いビニール袋や、原っぱのようになってしまった田んぼなど、そういうような現地の状態も実際に足を運ばなければ体感としてわからなかったことであり、本当に貴重な機会であったと思う。現地の方

の語りには切々とした強い思いが感じられ、「次の世代の皆さんに頑張ってもらいたい」とどの方もおっしゃっていたことが印象的だった。世代という流れのなかで自分たちの存在を意識したことがなかったが、ご高齢である当事者の方の切なる思いと期待を受け、人事としてこの状態を済ませられるものではないと気が引き締まる思いがした。

村の方が語って下さった中でとても印象的だったフレーズがある。「人間の再生こそが重要である。」ということである。この言葉のもつ重さをしっかりと受け止め、自分自身の研究であれ、実践であれ、活かしていきたいと思う。

---

東日本大震災から3年8ヶ月が経とうとしている現在、被災地の現状と抱えている困難を実際にこの目で見、肌で感じるため、福島県飯館村に訪問を行った。

飯館村は、2011年4月に計画的避難区域に指定され、さらに2012年7月に避難指示解除準備区域、居住制限区域、帰還困難区域の3区分に再編成された。村内活動には制限がかけられ、除染は国の責任で行うとされており、2014年度に居宅除染、2015年度から農地除染を行う計画である。飯館村は災害前まで農業に力を入れていた地域でもあり、土壌がだめになってしまった現状は、村民にとって大きな喪失となる。村に入ってまず目に飛び込んできたのは、大きな黒いビニール袋が山積みになって置かれている光景だった。汚染された土を入れ、仮に(本当は仮の仮くらい)置いているということだった。長い年月をかけて作られた肥沃な土壌の代わりに入れられるのは、学校の校庭のような土であった。農業の復興は望み薄であることは明白であった。また、生活している分には、災害前と見た目も変わらず、匂いもしない。その中で転居を余儀なくされ、未だに村に戻ることができない。荒れ果てた田畑や無人の家屋、店舗、郵便局がひっそりと佇んでいる光景が印象的だった。現在は持ち主が時々戻り、手を入れている家が多いということだったが、10年後には廃屋になるだろう、という話を聞き、村が廃屋だらけになる情景を想像してゾッとした。

村の方々が、「自分の代では復興は難しい。子どもの代も無理だろう。孫の代が帰ってくる時のことを考えて。」という考えを共有し、継続的な取り組みを見据えていってほしいと感じた。また、「外の人(国、政府)にやってもらうのではなく、村民が関わることに意味がある」という意識を強く感じた。しかしながら、なかなか予算がおりず、先の見えなさに不安を抱えながらの活動であった。

「福島の復興」とは何なのか。それは放射線量が低減することではない、「人間の再生」である。「生きがい奪う」というのが、一番の災害なのである。という言葉が印象に残った。いつ帰れるかわからない。問題は依然深刻である一方で、世間の関心もどんどん薄れていく。そうした先の見えなさ、村がなくなってしまうのではないかという不安により、「人間の再生」はますます深刻になる危険性がある。この現状において、心理職である外部の人間という立場である私にできることが、具体的にはイメージできないが、何かあるはずだと感じた。今回の経験を大事にして、これからも考え続け、アクションを起こしたいと思う。

---

震災直後の配慮のない研究者の訪問や心理職の介入によって、臨床心理士は受け入れられにくい状況であることは知っていたが、3年経っても帰宅できない辛さや長引く被災生活からの疲れから、心理面はかなり負担がかかっていることが考えられ、今回の訪問を通して心のケアの必要性をより強く感じた。1人1人に寄り添った線引きをという、ふくしま再生の会の方の言葉がとても印象的だったが、多少放射線量が高くても帰宅したい人、他の地域への移住を決意した人、避難所に残されて身動きが取れなくなっている人など本当に様々で、1人1人の状況に沿った対応が重要だとわかった。今まで心理職は被災者を一括りとして扱い、状況の改善を急ぎ、侵襲的になっていたかもしれないが、1人1人じっくり話を聴くという心理職の基本姿勢を保ち、被災者の方々のペースに合わせ、信頼関係を回復していくことが求められていると思う。

今まで私は、被災地に対して、原発事故の処理が進んでおらず、除染作業に時間がかかっているというイメージを強くもっていた。なので、除染が少しずつ進んでいるとはいえ、他の地域に比べ、依然として放射能度が高い土地に戻りたいと考える方々を良く理解しておらず、早く新しい場での生活を提供した方がいいのではないかと考えていた。しかし今回の訪問で、飯舘村の豊かな自然、それまでのゆったりとした時間の流れ、家族の繋がりがとてもかけがえのないものだったことを実感した。各土地には、それを所有する家族の何世代にも渡る物語があり、子どもの頃からの思い出がそこに息づいており、そこでみんなで暮らしていくことがずっと当たり前だった方々にとって、“ふるさと”を離れるというのは、それ以外の地域に住む人には想像しえない苦しみと悲しさを伴うものであることを改めて知った。

よって、今後部外者である心理職が可能な支援を考える場合、被災者の方々の喪失体験の大きさに配慮し、状況の多様性を尊重し、こちら側の予測や解決策を安易に押し付けないことはとても重要であるとわかった。それらは当たり前なことだが、実際に現場に行くまで実感が湧かないことも多く、この地域外で作成された心理援助プログラムが現場のニーズに合わないことも多かったのではないかと考えさせられた。

---

私にとって今回が初めての福島、あるいは被災地訪問だった。メディアを通じて見るのとは全く違う現状の様子というのが見えてきた。

まず、気になったのが飯舘村に入ってすぐ黒い大きな袋が、至るところに置かれていた点だ。除染作業で取り除かれた土が入っているという。100Lは入りそうな大きな袋がたくさんあり、もとは畑だっただろう場所に置かれていた。のどかな山間の風景の中に、黒い袋が点々としているのは、異様な光景だった。私の心の中にも黒いものが混じりこんだような、苦い気持ちになった。私でさえショックを受けたのだから、今まで自然とうまく付き合ってきた村の人々にとって、この光景はどれほど気持ちを苦しくさせるものなのだろうと思う。汚染された土は、まだ正式な置き場が決定していない。いつまでこの風景が続くかも分からない。さらに『除染作業中』ののぼり旗も、飯舘村を回る中で何度も目にした。震災によって、それまでの生活風景やそこから得られる安心感は失われてしまった。

もう一つ気になったのが、人同士のつながりが失われてしまった点だ。飯舘村は、放射能度によって現在 3 つの区域に分かれている。それに合わせて村の人々の気持ちも、ばらばらになっている。したがって村全体で一つの目標に向かって動く、ということも難しくなっている。さらに、小学校が今後どうなるか、という問題は、校区でのつながりが今後どうなるか、という問題と絡んでいた。話を聞くまでは、小学校の話は子どもがいる家庭にだけ関係すると短絡的に考えていたが、それは大きな間違いだった。東京に出てきてからあまり感じなくなってしまったが、そういえば自分が昔住んでいたところでも校区でのまとまりは強かったと思う。そうした普通の生活では当たり前で、気づかないようなものも、震災による被害で失われていた。そして家族の中でも、気持ちが一つにまとまらない、という話があった。この話も私にとって、非常につらいものだった。一番身近な人たちでさえ、意見がばらばらになって、住む場所もばらばらになってしまう。放射能は、直接的な人体への被害だけでなく、間接的に人同士の関係性にも被害を与えている。自殺も、人と人の、人と土地との関係性が侵された結果かもしれない。

これらの他にも、飯舘村に行って初めて気づいたところは多かった。こうした経験を踏まえて、飯舘村での臨床心理的な支援としては、どのようなものが考えられるだろうか。正直一回の見学では何とも言い難い。心理的な支援よりも必要なものがまだたくさん残っているのかもしれない。しかし、たくさんの人がそれぞれのつらさを味わっているのは確かだろうと思う。それぞれの人に共感して寄り添いながら、人と人とをつないだり、あるいは他の領域の人とも協力しながら、人と土地をつなぐような支援ができればいいのかもしれない。

---

このレポートでは、飯舘村を訪問しての感想と臨床心理士の為すべきことについて考えたことを述べてゆきたい。

そもそも訪問前、私は、放射線の除染の完了⇨飯舘村の復興というふう考えていた。おそらく私以外でもそのような考えを持っている人は多いのではないだろうか。しかし、それとは全く異なる現実を飯舘村に行って知ることになった。もちろん、除染が大前提にあるものの、さらにその上に、崩れてしまったライフスタイルをどうするか、村で再び生活するという気持ちをどう立て直すか、行政が安直とも思われる形で決めた区分けのせいでバラバラになってしまった村の人達をもう一度どうまとめるのか、といった村の人々の生活や気持ちに関わる問題が非常に大きく押し掛かっていた。そういった現状がある中で、しかしながら、国あるいは東京電力としてそのような部分に対するケアはほとんどないというような印象も同時に受けた。もちろん金銭的な賠償や支援はあるものの、実際の村民の生活を考えた、あるいは生活に寄り添った支援というのはないように感じた。除染のために削いだ土を飯舘村経済の生命線である農地に置いていることなどを考えると、「村民の生活を考える」という視点がそもそもないのではないかとさえ思われた。しかも今行っている除染作業も根本的な改善にはつながらない上に、イノシシに掘り返されてしまえば意味がなくなってしまうということであった。このような現地の事情を見

聴きしていると、国は何億もかけて、ただ「除染している」という事実を作り、飯舘村民“以外”の国民に納得してもらえよう仕事をしているのではないかという印象さえ受けた。村で暮らしている人たちはそういったことに対し、やりきれない思いを抱いているだろうし、怒りも覚えているかもしれない。本来は、国と地元住民が協力しあって、復興に向かっていくはずであるのに、村の生活、村民の気持ちを考慮せず、国が自身の都合で勝手に進めているように感じられた。しかも、実際の除染作業は国が企業に業務を委託し、さらにその企業が下請けに回すという状態になっているとのことで、本来支払われるはずの危険手当も実際現地で働いている人たちにはほとんど届かないとのことであった。そのような環境下で除染に当たるスタッフのモチベーションが上がるはずがなく、その結果もし除染作業が中途半端なものになってしまっているとしたら、今の状況は最悪に近い状態なのではないか、という危惧も抱いた。

また、今回聴かせて頂いた話の中に、飯舘村に戻らない人が多いことへの危機感というものが幾度か出てきた。もちろん震災前の生活や飯舘村そのものがなくなってしまうということは非常に悲しむべきことであるし、戻ってくる人が多ければとても喜ばしいことだと思う。ただ、私としては、除染も進まない、村に戻った後の生活の先行きも見えない状況が続いている、そして国からお金が、しかも畑をやっている時の収入と同程度の額が出る、という状況の中で村に戻らないという選択をする人が多いことに納得できてしまった部分もあった。ある意味ではとても合理的な選択だと思し、実際、今の支援の状況ではそういうふうな選択をせざるを得ない面もあると思う。

しかし、だからこそ、今回飯舘村でお会いした方々にとっても強い感銘を覚えた。飯舘村復興に強い想いを持ち、目先のことだけではなく将来を見据えて行動しているとても強い人たちだった。特に、菅野宗夫さんの「これからは我々が責任を問われる立場だと思っています」という言葉がとても印象深く心に残った。被災者であり、原発事故の被害者でありながら、それでも村の復興の責任を村民たちで負おうとする姿勢には衝撃すら受けた。

訪問前は、「被災者」「被害者」にこちらがどう支援するかということしか考えていなかったが、いざ行ってみると私が人の「強さ」をむしろ思い知らされた形になった。

ただ、今回はそのような強い方々ばかりにお会いしたが、原発関連死などのお話を聴いていると、やはりこういう人達だけではなく、心理的なケアを必要としている人もたくさんいるのだろうとも推察された。

そこで、こういった現状の中で臨床心理士がどういった役割を果たせるのか、何をすべきなのかということについて考えたことを最後に少し述べたい。

今回聴いたお話の中に100歳の男性が自殺をしたというものがあつた。これを聴いた時に感じたのは、現状では、欲しい時に、手の届く範囲に心理支援が無いということだ。この理由については2つ思い当たった。まず一つは、心理支援、心理職が認知されていないことだ。今回、「心のケア」や臨床心理と言っても、具体的なことを知っている人はあまりいないという印象だったことから、そのことがうかがえた。二つ目は、震災からある程度の日数が経ってから、被災者のケアをしようという心理職があまりいないことだ。震災直後、多くの心理職やボランティアが「心のケア」を名乗って被災地に赴き、そし

て断られた。そのことから今も、東北の被災地では外部からの心理支援は受け入れられないという印象が心理職には残り続け、その影響を受けて、心理支援が外部から入らない状況が生まれているように感じる。

このことは、被災地云々ではなく、臨床心理自体の問題であろう。専門性、存在意義を明確にした上で、それをきちんと認知してもらい、被災者の方に納得してもらおうということが今後早急に必要だろうと感じた。そのように被災地の方々に臨床心理のプレゼンスを示すことを前提とした上で、心理職は、怒りや不安の受け止め、これからの生活の展望やそれに向けての障害の整理、抑うつや PTSD への対処、ストレスマネジメント教育などの役割を果たすことが求められるだろう。

震災から時間が経ち、生活を再建しようという段階に来ているからこそできる支援が心理職にはあると思われる。そのことをもっと心理職全体がもっと意識し、行動を起こしていくことが今求められていると感じた。

---

これまで東日本大震災による被害というと、地震・津波による自然災害の被害を想起しやすかったように思う。しかし今回の飯舘村訪問を通して、きれいに色づいている一見何もおかしいところのない木々が汚染まみれである等の事実を目の当たりにし、原発事故による環境被害の深刻さを強く感じた。放射能という、目に見えない、いまだに発生し続けていつ終わるともわからない汚染物質が人々に与える影響は計り知れず、村の人々に対して自分が出来ることは何なのだろうかと考えさせられた。

今回の訪問で出会った現地の方は、比較的年齢層の高い方々ばかりであった。働き盛りの年代やより若い年代の人々は、原発事故に始まる一連の村への影響・自分たちの生活への影響をどう考えていらっしゃるのかについても、機会があれば直接お話を伺いたいと思った。今回現在使われていない小学校の校舎を訪ねた際に、小学校という教育の場がないと子どものいる家族が村で暮らすことは難しいというお話を聞きくことができた。村に残るか否かという判断は、放射能汚染そのものだけでなく、放射能汚染に付随して生じている行政上の問題も影響していることを知った。小学校以外にも影響を及ぼしている問題はあるだろうと思うので、その点についてもっと深くうかがう機会があるとよいと思った。

行政の問題と関連して、現在飯舘村で行われている除染事業に疑問を感じる場面もあった。汚染された土壌をためた黒いビニール袋の山を村内で多くみかけた。まとめるだけまとめて、汚染物質をそのまま現地に溜めている現状は、除染作業の長期的な将来の展望は見えないままであることを表していると感じた。汚染された木を伐採するだけで処分はしないことも、黒ビニールと同じような除染作業の実態の一例なのだと思う。また、車が通るたびにお辞儀するたくさんの交通整備の人たちも印象的であった。彼らが被災地出身なのかどうかは分からないが、彼らがお辞儀によって現地の人々に示そうとしている誠意のようなものと、現地の人々が欲しているサービスの食い違いが印象に残った。

<訪問を経て、今後考えていきたいこと>

今回の訪問で、原発事故のことを忘れないために後世に伝えていきたいという現地の人々の思いに直接触れた。確かにそのことは必要だと思う一方で、将来を担う若者が果たしてどれほどその現地の人々の思いを受け取っているのだろうか、ということが気になった。原発事故の現場から離れてしまうと、どうしても気持ちが緩んでしまうことはあると思うが、現地の人々の思いを叶えるためには若い世代の理解は不可欠であり、どこで両者の折り合いをつけることができるのか、より具体的にどうしていくことが今後事故のことを忘れないために必要になってくるのかということについて考えていきたいと思った。また、その点について考えていくことが、現在生じている被援助側と援助側とのミスマッチの改善、またミスマッチにより生じうる心理的負担の軽減につながると思う。

また、原発事故の被害に苦しんでいる人々の個人への心理援助はもちろんだが、コミュニティレベルでの心理的支援についても考えていく必要があると感じた。飯舘村を一つの地域コミュニティとしてとらえた場合に、コミュニティ全体で団結して危機に対処していくことのできる側面があると同時に、国からもらえる金額の違いによりコミュニティ内で衝突が生じてしまう側面もある。このようなコミュニティという観点で生じる心理的葛藤にも何らかの形で支援できないかと考えた。なお、個人レベルにしるコミュニティレベルにしる、心理的支援を受けること自体に抵抗のある人も少なくないと思うので、心理的支援が必要であると思われる人々にとって受け入れられやすいような形での心理援助を模索する必要もあると思う。

最後に、桜の木を植えるプロジェクトは未来があるととても素敵なプロジェクトだと思った。今回の訪問で見ることでできた紅葉しかり、木々の美しさは多くの人々が共感できるものだと思えて感じた。紅葉のきれいなこの季節に飯舘村を訪問できてよかったと思う。このプロジェクトの背景には、原発事故を忘れてはならないことを後世に伝えたい現地の人々の思いがある。普段東京でぬくぬくと暮らしている自分は、今までそのような人々の思いに直接触れることができないでいたので、今回訪問して直接お話を伺うことの貴重さ・意義を痛感した。今後も現地を訪問する機会を持ちたいと思う。